て良妻賢母たるあり。右は大略を記したるに止る。周章狼狽して、その戀人と絶ち、愛妻と別るべからず。

結婚當夜のキッスの音

これは女學生同志が集まつての話しの一節である。

その内の一人が姉の結婚當夜を語り出したまゝを。

ぷつ！　と、突然話手の少女が噴き出した。

——何うして？

一同の眼が彼女の顔に集まる。中には、最前から焦りて〳〵仕方のない女學生が、チエッ！　いま〳〵しそうに舌打ちする者も有つた。

——だつて、婚禮の場なんて、新派のお芝居見たいのね？

——いいわよ。そんなこと……。

——早くつてば！

——あなた案外勇敢でないのね。妾なんかだつたら……。

——然う！　こんな場合はジャンヌダルクのやうに勇敢でなければいけない、わよ！

——ヒヤ〳〵！

いや早や、その姦しい事〳〵。女三人寄れば姦しいといふが、これは人數にしてもその倍。しかも初めて胸のときめきを覺え出した頃。見る物聞く物。一つとして神秘たらざる無く、好奇心の湧かぬものとてないまして彼女等の足許には、樂しいやうな恐ろしいやうな、性の深淵が、魔の淵のやうに横はつて居る。況んや、話題がお姉様の結婚といふ頗る無類のエロテック。鼻の下に銀色の生毛がビロードのやう。高鳴る心臟のどよめきを豊かな手で、ソット押へた者もある。ゴクリ、と唾を呑み

込んで、さて婚禮といふ桃色にぼかされたイリユージョンは、彼女達の魂をあらぬ方角に引き摺つて行く。

——さつきあたし、お荷物が山へ登つて來ると云つたでせうっ、一寸變じやなくて？　それはかうなの。先のお家が湖の上の村なの。そして私の家は其處から六里も離れた町なのでせう。だものだから、その湖畔にある小さいホテルまで行つちやつたのよ。何だ彼だの、そりや大變な騒ぎなのよ。……そして、お登頃實家を出たお姉様たちの俥は、澤山の荷物を先登にしてワツサ〳〵とお祭りのやうな行列。

——まあー

——それでホテルへ一先づ落ち着いて、其處ですつかり着附からお化粧迄直すんだわ。

——大變ねえ！

——えゝ。でもね、昔は、もつと〳〵大變だつたのよ。あの邊としては隨分思ひ切つた新時代だゝつて東京の親類の人達も言つてたわ。それに、ハズがアメリカの學校を出た人でせう。だからまるで舊い式を無視してそれ丈よ。お父さんやお母さん達の舊思想が半分とハズの新思想が半分とゝなのよ。フ、ー！　これは附けたり。

——分つたわ〳〵。ぢや早くね。

——いよ〳〵本論！

と、話手の女學生が言つた時、一同の手は、期せずして、パチ〳〵と歡びに打たれた。

——舊式のお家なんだけれど、新郎の趣味で、お座敷の裝飾は思ひ切つて清新な、明るいフランス式なのよ。そして、崇重を感じさせるのは十二世紀式の宗教畫がクリーム色の壁に、黑いリボンで裝飾されて掲げ

られて居た。それが明るいお部屋の中の空氣をグット引き締めて居るのだわ。けれども、實際の式は純日本風だつたわ。新郎新婦が向ひ合つて座ると、新郎の方の側には親族の人達が、そしてお姉様の側には、親族の人に並んで仲人夫婦が、チャンとして座つてるのよ。小さい男の子と女の子とが、赤いお盃を新郎に捧げて、新婦に捧げて、それを一同の人々に仲人から廻はすのよ。それが濟むと、親族のお爺さんが、ホラ……高砂やあ、を唄つたわ。……アラわたしこん事忘れちやつたわ。

——？

——だつて、それやグド〳〵しいのよ。同じことを何遍も〳〵も繰り返すんですもの。だから了ひの半分なんか覺えてないわ。

——床直しつてあるの？

——するわよ。こゝでお姉様お衣裳をお更えに成つたわ。そして、初

めてお頭巾を取るのよ。そして、新郎と顔見合はせて、

——ニッコリなさつた？

——ホ、、、！　いやな方。

——でも、嬉し相な表情じやなくて？

——知らないわ。そんなデリケートな事。

——それから？

——それから、は、新郎新婦は他のお部屋、ハレム（寢室）へ引き取るんだわ。そしてお座敷はお客さんが何時までも殘つて騒いでゐるんだわ。然う〳〵、お姉様がお引き取りになるとき、仲人の奥さんと伯母さんとが一緒だつたわ。

——えゝ？

さ、待ちに待つた場面に到着しかかつた時、きき手の一人が思はず息

をはずませて奇聲を發したので、一同ドッと吹き出す。

——ハレムは、どんなお部屋？

——ステキよ。此處はなんて落ち着いた裝置でせう。あたしこのお部屋を外から一眼見てスッカリお姉さまが羨やましくなつたわ。だつて、幾ら、アメリカの學校を出た人だからと云つて、こんなに藝術的敎養のある男子なんて少ないわ。

——あなた、ハレムなんて神聖な結婚につかつちや失禮ぢやなくつて

——何故？

——だつて、ハレムていふのは、娼婦のあれぢやなくつて。

話し手は、つと口を噤んだ。實は、彼女とても、ハレムの本當の語義を知つて使つたのではない。オリエンタル、が馬鹿に詩的に響くところから好きであるやうに、ハレムを好んだのに過ぎない。だから、かう追

求されて見ると、胸が怪しくも戸迷ふのも無理はない。

——然うよ。このやうな淑女紳士の寢室に、ハレムなんて呼び方は冒瀆だわ。

と、中でも一番年長らしいのが決定權を高唱した。

——ハレムのローマンスていふフランスの小說をお讀みになつて？……それやあワイよ。男が毎日〳〵變るんぢやないの、其處のヒロインはとても博愛主義。お客を何うすれば有頂天にして歸へす事が出來るか、なんて事を生活の全部にしてゐるのよ。

——まあ！

——だつて××さん。王宮にも有るのでせう？

——えゝ、有ることは有るらしいわ。けれどそれだつてお妾さん見たいなものよ。だからあたしの次の時代にほんとうの自由戀愛時代が來て

も、ハレムのやうなものは全然必要ぢやないわ。

——然うね。ぢやあ××さん！

と、話し手の女學生に向ひ、

——前言取り消しをなさつちや何う？　そして早やく先へ行きませうよ。

——それではハレムを取り消すわ。

——えゝそして夜の部屋になさいな。

茲で、先づハレムの方はそのやうな譯で取消し、改めてローマンスはナイトルームの中で發展しやうとする。が、我親愛なる讀者諸君よ！諸君は既に、女學生の如何に愛すべきものであるかを御承知であらう。これを見ても分る。彼女達の聞かうとし、彼女達の云はうとするローマンスが、新婚の部屋に於ける空想七分の性的描寫だといふのに、ハレム

なる語は神聖を瀆すものだといふ理論に附會しなければ氣が濟まないのである。このやうな少女が將來のマダムと成る。當今無數の不良マダム又一日にして成らざる所以かなだ。

——窓に綠のカーテンが垂れてゐたわ。そして、お部屋の中は夢見るやうな淡紅色の配光。お部屋の眞ン中に敷き並べられた一組の夜具。純白の敷布に、上に掛つた夜具の燃えるやうな紅の艶かしさ。

——う——む！

——あら！

——野次はお斷りします。それから！

——そのお部屋へ、床直しでお着附を直したお姉さまが先に、後からハズ、その後から小母さんが二人續いて這入つて行つたわ。すると、間の唐紙が音もなく閉ぢつちやつたわ。

——まあ詰んない！

一同思はず失笑——が直ぐに怪しい眼付で睨む眞似。

——あたしこそ詰んなかつたわ。これでおめ〳〵と引き下つたのでは今までの苦心が水泡に歸するぢやないの。それで、どうしたと思つて？

——何うして？

——あたしちやんとこんなことが萬一あつた場合にはと、思つて、チヤンと第二の計劃を用意してゐたわ。

——偉い！

——だからちつともあわてなかつたの。ゆう〳〵と、次のお部屋へ取つて返へしました。ホ、、、笑つちやいやよ。そのやうな晩だから、それにお座敷ではまだ澤山のお客さまが騒いでゐらつしやるのでせう。男の人や女の人がウロ〳〵してるんですもの。あたしなんかに構つてる人

は一人だつてゐやしないわ。此處が絶好のチヤンス！

——旨いわねえ。

——このチヤンス逸すべからずと、直に第二の計劃に移つたわ。ソツトお部屋をはずしたの。そしてあたし達に當がはれた部屋へ歸つて來たわ。このお部屋の一方は仲庭に面し、一方にドアがあり、ドアを開けるとサンルームがハレム、おつと御免なさい。ナイトルームの外にあるのよ。この家の中の建造は、スツカリお兄様の趣好になつたものだから、こんな時には理想的なので。あたしの、計劃といふのはそのサンルームへ忍び込むことだつたの。

——あゝ然う！

——首尾よく忍び込めて？

——えゝ上々吉。ホホゝだつて隨分冒險だわね。とても今の私には出

來ない事よ。といふと、すかさず一人が、

——どうだか！

と言つたので時ならぬ喊聲が擧がるのを、年長のが怖い顏して押し止める。

——不安は不安だつたわ。それでもどうにか音も立てずに忍び込めたので、ソット足音を忍ばして窓の方に近づいて行つたの。そしたら、まあ、お二人が立つたまゝでキスしてらつしやる。

パチ〳〵、と猛烈な拍手と喊聲。それが一しきり靜まると、

——立つてらつしやるの。

——然うよ。お姉様の顏、とても嬉しそうなのよ。眼をかう上へ向けて、半ば開いて夢見心地なの。そして、ハズの肩の上へグッ、

——あらいやだ！

——御免なさい！　あたしツイ、失禮ね。かういふ風に手を置いてるのよ。

——まあ！

——そして二人共固くなつてるの。それから暫くして、靜かに離れたわ。お二人共お寢卷なの。お兄さまが何かおつしやつたやうだつたわ。すると、お姉さまが、ニッコリ笑つて、二人は顏を見合はして、又…。

——キッス？

——然う。とても猛烈なのよ。そして、今度はだけど早かつたわ。でも、そのままでつと、お床へおはいりになつたの時々、

すつたのね。大分時間が經つて、×××××××××然うかと思ふと、

一同の中から、苦し相なき聲を發する者がある。（夜の東京より）

昭和三年十月五日印刷
昭和三年十月十五日發行

定價金七十錢

東京市日本橋區藥研堀町五十二
編輯兼發行者　湯淺修一

東京市神田區猿樂町二丁目一
印刷者　村山儀次郎

東京市神田區小川町一番地
發行所　株式會社　春江堂
電話神田四三四八番
振替東京一八〇六番

不許複製

柴風1
77